

京都市・乙訓地域公立高等学校入学者選抜に係る 懇談会（第4回）の概要について

1 日 時 平成19年6月1日（金）午後5時～午後6時40分

2 場 所 ルビノ京都堀川 ひえいの間

3 概 要

（1）事務局からの説明

（2）意見交換

4 意見交換

- 昭和60年に現行制度が出来たときには最善の方法だったと思うが、20年以上経つ中で様々な方法で改善を重ね、現在はひとつの限界ではないか。選択肢の幅を広げることを考えるならば「シンプルさ」というのが非常に大事である。制度を変えないで2通学圏にするならば、さらに様々な問題が出てくるだろう。単独選抜でも、選抜制度を工夫することが出来るわけだから、第1希望に行けなくても、第2・第3希望に行けないということはない。シンプルになるということは、指導が容易な側面も出てくると思う。序列格差という話もあったが、特色を持って選べるように各学校が工夫をしているわけだから、その序列に基づいて、特定の学校を誰も志願せず、特定の学校に全ての志願者が集中するということはあり得ない。生徒が望む様々な学校があるので、その選択肢をもっと自由にすれば、中学校も非常にわかりやすい形で進路指導ができるのではないか。
- 2通学圏が適当ではないか。1通学圏となれば、交通費の負担も増える。通学圏を拡大し過ぎればデメリットのほうが多いのではないかと考えている。
- 生徒が目的意識を持ってその学校に行きたいと努力して学校に入れば、例え遠い学校であっても満足感を持てるのではないか。また経済的にも非常に苦しい中で、学校生活を非常に真面目に過ごしている子どもたちが、学力検査だけでなく面接や人物評価で、この子は本当に真摯に生活をしているという部分で、何とか公立への道が開けないか。
- わかりやすい制度であれば単独選抜も視野に入れるべきではないかと思うが、2つの通学圏くらいにして今の総合選抜の良さを残すことも必要ではないか。親子が同じ高校に通ったことを誇りに思うような地域性を大切にすることや、今の通学圏の学校には行けるという中で通学圏を拡大するというのであれば、子どもたちや保護者のニーズに応えられるのではないか。
- 今の状態が悪いという方向性で議論が進んでいるが、高校の立場から言うと、通学圏がどのようであろうとも、中学生にとって行きたい学校になるよう努力することは当然であり議論の余地は無い。しかし単独選抜になれば、一定の価値観のもとに全てのものが振り分けられる傾向が非常に強まると思う。多元的な評価という観点は無くなるだろうと予想される。同じ高校の中に、いろんな学力の子、いろんな能力を持った子がいることが大事。クラブ活動や集団的な活動を通して、様々なリーダーシップや仲間の和を学ぶという大切な学校の機

能がある。それには多様な子どもたちが学校にすることが必要。社会に出るにあたって本当に必要な力は、大切な高校の時期を社会と同じ多様な環境で過ごし、様々な勉強をして集団で何かをやっていくということが大切。そういうことが自然にできる今の通学圏の総合選抜制のあり方も、非常に意義があるのではないか。

- 高校としては、選ばれる高校になるために一生懸命努力していかなければならない。広い通学圏になっても、高校の努力ということが一番の先決ではないかなと思う。
- 公立高校全体が良くなっていかないといけない。様々な生徒がいて、子どもたちが切磋琢磨して、高等学校の生活を送るとするのが理想。全圏1区で単独選抜になっても、5年10年経ったら、おそらく高等学校の序列がついて、進学校とそれ以外の学校に分かれるのではないか。行きたい学校、受検したい学校があるのなら、2通学圏に分けたとしても、圏を越えて行けることで解決していけるのではないか。行きたい学校に行けるとするのは間違いであり、行きたい学校を受検できるというだけ。そういう意識をきちんと持っていなければいけない。
- 中学校としては、全員の子どもを合格させたいが、第1希望にどれだけの子どもが合格するのか。第2希望、第3希望、どこの学校でもいいから合格するとしても、結局第1希望に行けなかった生徒は辞退して私学に行くのではないか。今より辞退が増えるのではないか。ひとりひとりの子どもたちの進路実現を考えれば、総合選抜を止めることは、子どもたちのセーフティネットを奪うことになるのではないかと感じている。
- 自分の個性能力を正しく評価でき、自己評価できている子や、自分の希望進路をしっかり持っている子もいる。他の子どもたちと競争する中で頑張ることのできる子も確かにいる。しかしそれらが出来ない子もいる。そういう中で1圏単独選抜が落ち着いたとしても、状況は悪化する高校があるのではないか。
- 部活等については、特別な能力を必要とするものもあるので、限られた枠内ではなくて、全圏を対象にすることも必要だと思う。また高等学校の特色に基づいた選抜制度が現在は充実していないのではないか。部活特活枠を工夫したり、新たに別の枠を作っていくことで対応ができるのではないか。
- クラブ活動などで高校を選んで仮に挫折をした場合、遠くに通っていればいるほど古くからの友達や支えてくれる友人がおらず、悪い方向に道を外れる可能性が高いのではないかと不安である。そして何より地域の学校、地元の学校であれば、地域とのつながり、親とのつながり、そして子どもたちが卒業してもつながりが維持できるところが良いところだと思う。
- 選択肢が増えすぎれば、一番大切な勉強が疎かになってしまっていて、選ぶことに重点が置かれるように思う。また1圏だと1つの学校に志望が集中して、格差ができすぎるのではないか。将来、やはり京都市は1つになるべきだというふうになったらその時点で考えればいいのではないか。自分の通学圏以外にまで行きたいという子に対しては、他の特別枠を設定して、入りたいのであれば努力をしなければだめだということをしっかり中学生に教えていただきたい。

- 序列化された下の学校は努力して良い学校にすればいいし、どんどん下の学校は努力して良くすれば、全体がある程度良くなるのではないか、特色を出せるのではないか。
- 単独選抜にすれば、定員割れをする高校は出てこないのか。総合選抜ならば、多分定員割れは起きないが、単独選抜にするとどうなのか。2通学圏くらいにして総合選抜を残し、何らかの方法で他の通学圏へも行ける方法を考えるのがいいのではないか。
- 単独選抜では、希望者が偏ることはあるかと思うが、公立高校に行きたいという希望がある以上は、第1希望以外は受けられず、それが不合格になったら終わりということは、公立の責任としてはありえないことだと思う。生徒自身の希望がかなえられる可能性は、単独選抜のほうが高いのではないか。序列といえば大学進学率によるものというイメージが強いかと思うが、それだけではないのではないか。公立高校としては、それぞれ生徒を受け入れる中で、その生徒をどう育てるかということが、一番の使命。単純にⅢ類の生徒が学力検査だけで選抜されれば、誰一人として合格できない。しかしⅢ類の特色として、適性を含めて選抜している。また定時制としてⅠ類よりも遥かに低い点数しか取れない生徒も入学している。それぞれ学科、類・類型がある中で、特色化を図って、入ってきた生徒を責任を持って指導する、進路実現を図る、というのが高等学校の狙う部分。学校の特色化を図る中で選ばれていくことが必要。
- 基本的な考え方として2通学圏がいい。本当に適切に高等学校の特徴や校風を中学校が保護者に伝えるためにはこれくらいが限界だろうと思う。20数校になると到底無理。選ぶこと自体が非常に難しくなる。学校格差は1区にしたら2区にするより遥かに進むのではないか。
- 2通学圏に分かれるのであれば、1通学圏あたり10校か11校になるので、現在の保護者や生徒の選択のニーズというのはその中に含まれるのではないか。10校あれば、その中から自分の行きたい学校を選べるのではないか。
- 私立高等学校のようにその学校を受けて合否が決まることは確かにシンプルだが、Ⅰ類は総合選抜で一定定着しているので、制度がわかりにくくて中学校現場で負担にはなっているというようなことはない。
- 中学校には様々な生徒がおり、地域の学校に友達に行きたいという子もいれば、逆に人間関係の問題で地域の学校ではない学校で頑張りたいというような子がいたり、公立だったらどこでもいいという子もいれば、私はこの学校にどうしても行きたいんだと考えている子どもたちもいる。子どもたちの価値観や考え方にもものすごく違いがある。
- 子どもたちの選択権の幅はある程度広くしながらも、通学圏は地域性も残すというようなところで、いろんな違いのある子どもが公立高校を選択できるという制度にしていだけたらと思う。私学に行けない経済的事情を持つ者が、何とか公立に入れるようなシステムができないかと思う。
- 単独選抜にすれば、大学進学実績による序列がつくのではないか。公立高校全部に良くなって欲しいと思うし、ひとつひとつの高等学校が特色を出して頑張っていかなければならな

いのは当然だと思っている。単独選抜にすれば、そういう努力にもかかわらず、やはり序列化が進むのではないかと思う。下の方の高等学校が頑張ったとしても、すぐに序列が変わるような簡単なものではないと思う。定員に満たない高校が出てくると思う。第2・第3・第4希望などを活かしたとしても、不本意入学を多く作る仕組みは有効なものだとは思わない。部活や特別活動で選べる枠があれば十分だと思う。広く対応できるシステムを考えたときに、総合選抜を残して2圏が望ましいし、特別活動の希望枠を全市対象にしておけば、ほぼ希望はかなえられるのではないか。

- 多元的という言葉があったが、通学区域を越えた希望をかなえるシステムで対応できないか。シンプルな制度は学力のみに基づくシンプルな尺度で選抜されることが危惧される。学力で選抜されるだけでなく、学級活動の役割を一生懸命やったり、掃除をきちんとやったりするものの、勉強に不安がある、ご家庭の経済力に不安がある、そういう生徒の進学先を何とかしたいというのが中学校側の願いである。
- 今、普通科高校の存在価値が問われており、進学率が上がる中で、ある程度の学力的基礎もつけ、生きる力もつけ、いろいろなものをつけなければならない中でどのように特色を出していくか非常に迷っている。ただし、普通科の特色を高めることは、そのことをもって単独選抜や1通学圏につながるものではない。
- 受験機会を複数化すると非常に厳しい日程になるが、その点でも現在の総合選抜制度は非常に良い制度である。Ⅱ類を第1希望とする生徒が不合格だった場合も、普通科Ⅰ類で合格すればバス停方式で自宅に近い学校に入学できる。受験機会が1回でも総合選抜制できめ細かくセーフティネットを張っていく制度がいいのではないか。また、2通学圏でも、それぞれの中で各学校が良い特色を出していけるのではないか。
- 公立高校の入学者選抜にあたっては、制度だけに関わるのではなくて、受け入れる高校側は学校の特色、校風、取組状況をきちんと中学校に見えるように取り組んでいかなければならない。存在感のある学校、ひとつひとつの高等学校が足腰の強い高等学校になって、公立高等学校全体がレベルアップしていかなければならない。中学校としても、一人一人の生徒が今まで以上に自分の良さを発揮できて、意欲を持って、勉強・部活動に取り組んで、その結果として、ひとりひとりの進路希望の実現を図らなければならない。そうした双方の教育活動がプラスになるような形で、選抜制度の運用を、中学校・高校ともに考えていかなければならない。そのことが、保護者の信頼や希望に沿える形になっていくのではないか。
- 総合選抜・単独選抜と制度の違いはあっても、まずは生徒が希望する学校を選択できるという観点が必要であろうという点が、皆に共通していた意見ではないか。ただ、生徒を送り出す中学校側としては、選択肢が多くなり過ぎることで子どもが進路選択に迷うことを避け、保護者・中学校の進路指導を円滑に進めるために、一定の制限を設けるべきだという意見が強い。また、受け入れ側の高校としては、現行制度の良さを活かしながら、生徒の希望をより活かしていけるようなシステムに向けて改善すべきところは改善すべきだという意見である。